

CONTENTS

診療科紹介

[糖尿病・代謝・内分泌センター]

病気だけを診るのではない、人を診る診療科です

[血液・腫瘍科]

患者さんの心に寄り添った全人的医療を目指して

中央施設部門紹介

[感染管理部]

患者、家族、仲間、すべての人たちを感染から守る、それが私たちの使命です

[輸血部]

輸血細胞治療部門のスペシャリストで輸血細胞治療をサポート

[医療安全管理部]

大森病院における安全と信頼の医療を私たちは守ります

TOPICS

看護部 / ボランティア

Toho University Omori Medical Center
Public Relations Magazine

VOL.
009

おかげさん



OKAGESAN

VOL. 009 2024 SUMMER



“患者よし・地域よし・病院よし”の三方よしを目指し、
地域の皆様に大森病院の旬な情報を年4回でお届けする広報誌「おかげさん」です。



東邦大学
医療センター

大森病院

糖尿病・代謝・内分泌センター



教授 弘世 貴久 ひろせ たかひさ

病気だけを診るのではない、 人を診る診療科です

東邦

大学医療センター
大森病院
糖尿病・代謝・

内分泌センターは前身の旧第一内科の内分泌科と旧第二内科の糖尿病科が2003年（平成15年）に合併してスタートしました。医者が奨める専門病院や名医ランキングの上位に選ばれる診療科として全国レベルで活動しています。

患者さんの想いに寄り添う

糖尿病治療

食生活の欧米化、交通の発達、更には高齢化の影響で我が国の糖尿病人口はいまだ減少傾向を見せていません。糖尿病治療の難しさは単にこんな薬を飲めば大丈夫という点ではなく、患者さん自身が生活習慣を見直す必要があるという点です。一人ひとりの顔が違うように生活習慣も様々です。しかし、そこには人それぞれの価値観、

想いなどがあり一律にこうしようという指導されても実行は難しいと思います。「食べるな」「動け」とい

われその上「注射まで打たされる」と考えて受診を敬遠されることがないように、私たちは極力「禁止すること」を避け、患者さんの価値観、想いなどを傾聴し、豊かな人生を損なわずにご一緒に相談させていただきながら治療法を決定していくことを信条としています。

この数年で著しく進化した薬物療法はそんな治療を実現可能とてくれると考え、積極的に導入、更に最新の血糖モニタリングシステムやポンプ治療なども取り入れています。

ホルモンの病気？詳しく説明、

納得のいく治療を実践

内分泌疾患の診断と治療

当科では糖尿病とともに内分泌疾患を専門分野としています。特に甲状腺疾患の患者さんは非常に

多く、豊富な経験に基づいた最善・最適な診療を展開しています。更に副腎疾患、視床下部下垂体疾患、副甲状腺疾患など希少な疾患にも対応できる専門医がお待ちしています。

内分泌疾患の原因、治療法、予後などを詳しく説明し、なかなか理解の難しい内分泌疾患の治療を患者さんにもきっちり理解していただくように努めています。

人を診る診療科

糖尿病・内分泌疾患は検査の病気などと言われることもありすが、我々は決してそう考えていません。病気を抱えているのは患者さんです。検査結果は患者さんの身体や心からの訴えと考えてきめ細かい問診・診察を行い、治療法を決定していくことを一番大事に考えています。大学病院ですので紹介状が必要ですが、どうぞお気軽にご相談ください。

血液腫瘍科

准教授 竹林 ちあき



たけばやし ちあき

患者さんの心に寄り添った 全人的医療を目指して

血液の研究とともに発展した 血液内科

血液学の歴史はとても古く、紀元前の医師たちが盛んに血液を研究したことから始まります。19世紀にヨーロッパの研究者たちが血液学の基礎となる重要な事象を次々と発見したことで、20世紀に血液学は飛躍的に進展しました。そして1946年にアメリカで血液学専門誌である「Blood」が発行され、その11年後にアメリカ血液学会（ASH）が設立し、より科学的で国際的な血液学の研究が始まりました。肉眼で見える血液という液体から肉眼では認識できない血液細胞の研究に発展し、細胞を形成する骨格や様々な分子、そしてその分子を介する機能、さらに染色体や遺伝子の解析など、血液学は目まぐるしい速度で進歩しています。そしてさらにこの1世紀先にはどのような血液学が展開されているのか、想像するだけで心が躍ります。

血液内科における最近のトピックス

血液内科では、白血病やリンパ腫といった血液がんだけでなく、貧血、血栓症、出血傾向、免疫不全症など、多岐にわたる疾患を診療しております。これらの疾患に関わる検査や治療も著しく進歩しております。現在の治療のトピックスとして、1. 免疫療法（CAR-T療法、2重特異性抗体薬）、2. 分子標的薬（抗体薬物複合体、低分子化合物）、3. HLA半合致移植などの造血細胞移植療法の進歩、4. 新規抗がん薬（免疫調整薬、エビゲネム薬）があります。さらにこれらの治療を組み合わせることで、毒性を軽減し治療効果を上昇させることが期待されています。

最善の診療を適切に行うことを 目指して

侵襲が低く短時間で解析可能な検査や新規治療薬の開発は、患者さんの生活の質を高めます。しか

し患者さんの価値観やその背景は様々であり、同じ疾患でも治療に対する反応や毒性は異なります。そのため科学的根拠に基づいた診療を認識したうえで、個々の患者さんの心に寄り添った医療を提供することを目指しています。私たちは、血液内科の進歩と発展に貢献し、患者さんの健康と幸せを守るために日々診療や研究に努力してまいります。



竹林 ちあき



感染管理部



部長 館田 一博 たてだ かずひろ

患者、家族、仲間、
すべての人たちを感染から守る、
それが私たちの使命です

病院

には常に様々な細菌、ウイルスなどが持ち込まれる可能性があり、患者さんや職員を守るため感染対策の活動が欠かせません。また、感染対策は一つの病院だけでは完結できず、地域の皆さまや医療機関、介護施設、行政機関などと連携し一体となって取り組む必要があります。

感染管理部は当院における感染対策の中心的な役割を担っています。この中には全般的な感染対策を担当する感染制御チーム（ICT）と抗菌薬の適正な使用を推進する抗菌薬適正使用支援チーム（AST）があり、それぞれに専門知識と経験のある医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師が属し、患者さん・職員・地域の皆さまを感染症から守るため活動しています。

実際に私達が行っている感染対策活動についてご紹介します。

◆院内ラウンド

病棟や外来、検査室、治療室などをまわり、感染対策の実施状況を定期的にチェックしています。また、薬剤耐性菌が検出されたり問題となる感染症が発生した際は各部署に赴き原因究明や改善に努めています。

◆抗菌薬適正使用の推進

抗菌薬の過剰な使用による薬剤耐性菌の増加が世界中で問題となっています。当院ではこれを防ぐため、使用されている抗菌薬の種類、量、タイミングなどをチェックし、適正な使用を推進しています。

◆職員の感染予防対策

病院で働く職員が感染すると皆さまに十分な医療を提供できなくなったり、患者さん達にも感染させてしまう可能性があります。職員の感染リスクを最小限に抑えるため、感染予防対策の立案や適

切な設備、防護具の選定などを行なっています。

◆教育

感染症や感染対策に関する知識や最新のガイドライン、手技などについて、職員や学生に対し研修会などを通じ教育・情報提供を行なっています。

◆環境整備

病院内の環境を整えることも感染管理部の重要な役割です。病室の清掃・消毒や設備の管理が適切に行われていることを確認し、清潔で快適な病院環境を維持するよう努めています。

◆地域連携

感染対策は地域全体で取り組む必要があります。当院は地域の中枢医療機関として近隣の病院と定期的な勉強会を開催したり、医師会・他医療機関・保健所などと密に連携し、感染症への円滑な対応やレベルアップに努めています。

輸血細胞治療部門の スペシャリストで 輸血細胞治療をサポート



輸血部

部長 高橋 浩之 たがはし ひろゆき

輸血

部は1971年に設置され、現在で55年の歴史のある部署です。外来採血部門と輸血検査部門からなり、医師1名、臨床検査技師20名、看護師4名の構成で安全な外来採血および迅速な輸血細胞治療を支えています。

2号館2階で各外来診療科のほぼ中心に位置し、多くの患者さんの検体検査の窓口として機能しています。採血ブースは最大15台が稼働しており、採血までの待ち時間の短縮に努めています。2023年度はのべ16万人以上の患者さんの採血を行いました。

外来採血部門

輸血に関する検査、血液製剤の管理と供給、自己血採血、細胞治療を行っています。認定輸血検査技師の資格を持つものが11名、細胞治療認定管理者が5名、認定HLA検査技術者が1名在籍し、国内では最多の有資格者で院内の輸血細胞治療を支援しています。輸血用血液製剤は皆様からの

輸血検査部門

腎センターで行っている腎移植では、ヒト白血球抗原（HLA）型やHLAに対する抗体の検査が移植の成否には重要です。輸血部ではフローサイトメトリなどの最新機器を使用してHLA関連検査を行い、移植医療を支援しています。自己血採血は、専属の看護師3名を中心に貯血式自己血採取を行っています。主に産婦人科、整形外科の患者さんが中心であり安心して自己血採血を行える環境を整備しています。細胞治療領域は、血液腫瘍科および小児科の患者さんに対し、末梢血から造血幹細胞を採取・保存し末梢血幹細胞移植を行っています。他にも眼科やリプロダクションセンターと協働し、ドライアイの治療や不妊症治療に関わっています。また、大学病院として多くの研究と学生教育にも取り組んでおり、今後も患者さんに安心して治療いただける支援体制を維持してまいります。

献血でいただいた貴重な医療資源ですので、安全、確実に患者さんに提供できるよう、管理に努めています。

診療科との協力

腎センターで行っている腎移植では、ヒト白血球抗原（HLA）型やHLAに対する抗体の検査が移植の成否には重要です。輸血部ではフローサイトメトリなどの最新機器を使用してHLA関連検査を行い、移植医療を支援しています。自己血採血は、専属の看護師3名を中心に貯血式自己血採取を行っています。主に産婦人科、整形外科の患者さんが中心であり安心して自己血採血を行える環境を整備しています。細胞治療領域は、血液腫瘍科および小児科の患者さんに対し、末梢血から造血幹細胞を採取・保存し末梢血幹細胞移植を行っています。他にも眼科やリプロダクションセンターと協働し、ドライアイの治療や不妊症治療に関わっています。また、大学病院として多くの研究と学生教育にも取り組んでおり、今後も患者さんに安心して治療いただける支援体制を維持してまいります。



医療安全管理部

部長 前村 俊満 まえむら としみつ

大森病院における

安全と信頼の医療を

私たちは守ります

医療

安全管理部は、患者さんや開業医の先生方には耳慣れないかもしれませんが、患者さんに安全で質の高い医療を提供するために、医療事故の予防と再発防止に力をいれている部署です。特定機能病院に設置義務のある病院長直轄の部署であり、医師、看護師、薬剤師、臨床工学技士、診療放射線技師、臨床検査技師、事務職などが、チーム一

丸となって医療安全の推進に努めています。

具体的な活動としては、インシデントレポートの分析と改善策の検討、医療安全に関する教育・研修の実施、医療機器の管理体制の整備、薬剤の適応外使用の監視、院内死亡事例の検討などがあります。院内の巡視を定期的に行い、現場を見て、現場の声を聞くことで、潜在的なリスクの早期発見と改善につなげています。また、突然の大量出血に対応するため、定期的に茶番劇を行い、緊急輸血のデモンストレーションを行っています。

外部調査では、他病院と連携し自分たちでは気づけないような問題点を指摘していただき、改善に努めています。他にも、患者さん

やご家族からの意見や要望を真摯に受け止め、医療の質や安全の向上に向けて協議しています。

医療安全を担保するには、当院の医療従事者だけでなく、患者さんやご家族のご理解とご協力が必要です。医療従事者も人であり、残念ながら一定の確率でヒューマンエラーを起こします。患者さんやご家族、開業医の皆さんには、当院の医療従事者と一緒になって治療法や服用している薬剤の妥当性を確認していただき、不安や問題があれば遠慮なくご指摘ください。私たちは、患者さんの安全が何よりも大切と考えています。今後、患者さんに信頼され、安心して受診していただける病院を目指し、医療安全管理部の活動を推進してまいります。

患者さんが治療を続けながら
自分らしく生活が送れるように、
チームで安心、安全に

治療を受けられる環境づくりを

大切にしています！

5名（2名ずつ交代制、がん専門・がん薬物療法認定薬剤師を含む）、常駐医1名（交代制）、歯科衛生士1名、クラーク2名、ヘルパー1名で運用しています。1日約40〜60件、年間約10000件の治療を行っています。抗がん薬治療以外にも消化器内科の炎症性腸疾患、膠原病の関節リウマチの点滴も対応しています。

治療の流れは各診療科外来で担当医師の診察を受け、治療可能であることが確定したら来室となります。来室後はベッドサイドに看護師が伺い、挨拶と同時にコミュニケーションを図りながら、バイタルサインや自覚症状、その時点での体調を把握し、不安や疑問に対応してから治療を開始できるように心がけています。患者さんのその時に発した言葉を逃さず、帰宅後も自宅で安心して日常生活が送れるように、関わる多職種と速やかに情報を共有し、セルフケア支援、副作用症状緩和のアドバイスを行います。外来化学療法室には多職種が常駐している為、何事もすぐに連携できるのが強みです。また治療中の緊急時対応の振り返りやケースカンファレンスを積極的にを行い、日々安全に投与管理ができるように努めています。多くの心配事を抱えながら治療に臨む患者さん1人1人の悩みに寄り添い、その人らしい人生が送れるよう共に考える姿勢を大切にしています。毎回治療がリラックスして受けられるよう和やかな雰囲気、患者さんとの関係性が築けるようにスタッフ皆心掛けています。「今日の担当はあなただから安心する」「家では話せないけど、ここなら相談できる」などのありがたいお言葉をいただくこともあります。その言葉を大切に、これからも治療の支えとなるようチーム一丸となって日々努力していきたいとおもいます。

薬物療法は新規薬剤の開発、副作用に対する補助療法の進歩により、従来入院で行われていた抗がん薬治療の一部が外来通院で安全に、安心してできるようになりました。

当院外来化学療法室は2010年4月に外来治療をする全診療科の患者さんを受け入れる為、1号館3階に開設されました。現在ベッド40床、リクライニング7台で専任看護師7名（がん化学療法看護認定看護師を含む）、専任薬剤師

約10000件の治療を行っています。抗がん薬治療以外にも消化器内科の炎症性腸疾患、膠原病の関節リウマチの点滴も対応しています。

治療の流れは各診療科外来で担当医師の診察を受け、治療可能であることが確定したら来室となります。来室後はベッドサイドに看護師が伺い、挨拶と同時にコミュニケーションを図りながら、バイタルサインや自覚症状、その時点での体調を把握し、不安や疑問に対応してから治療を開始できるように心がけています。患者さんのその時に発した言葉を逃さず、帰宅後も自宅で安心して日常生活が送れるように、関わる多職種と速やかに情報を共有し、セルフケア支援、副作用症状緩和のアドバイスを行います。外来化学療法室には多職種が常駐している為、



看護部

がん化学療法看護認定看護師 主任 森口 容子 もりぐち ようこ

ボランティア

の活動紹介



からだのとしよしつ

こんにちは。ボランティアルームです。
今回は、「からだのとしよしつ」の活動についてご紹介いたします。

からだのとしよしつは2号館3階にある、患者・家族、また医学情報が必要とされる方のための小さな図書室です。

当院のスタッフにより承認された医学書、病気に関するパンフレット、患者会資料が揃っています。パソコン、コピー機も完備しており、司書と共にボランティアスタッフが調べ物やパソコン操作のサポートを行っております。

ご利用にあたっては、面倒なお手続きは一切不要です。お名前を伺う事はありません。からだのとしよしつで受けた質問や利用された情報について、担当医やご家族、その他の方に伝えることも決してありません。

院内はどこも騒がしくて、心が落ち着かないという方、是非からだのとしよしつに足を運んでみてください。少し奥まった秘密基地のような場所にあり、室内には静かなクラシック音楽

が流れています。ご利用者さまにすこしでも癒しをと考え、ボランティアスタッフにより四季を感じられる装飾なども施されています。
2号館3階「F4」めがけていらしてください。



編集後記

今号を最後までお読みいただきありがとうございます。

昨年5〜9月の熱中症による救急搬送数は全国で91467人と、2008年度の調査開始以降2番目に多い搬送数でしたが、気象庁は今年の夏も地球温暖化に加え、南米ペルー沖の海面水温が上がるエルニーニョ/ラニーニャ現象の影響で全国的に気温が高くなり、猛暑日が増える予想していますので、皆様におかれましては十分な熱中症対策をお願いします。

さて、お手元の健康保険証は2024年12月2日に廃止されマイナ保険証に一本化されることになり、廃止日以降は新しい紙の保険証は交付されません。マイナ保険証の利用により患者さんにも多くのメリットがございますので、これを機にマイナ保険証の利用をご検討ください。当院はマイナ保険証カードリーダーは3号館総合受付・MYステーション・入院会計に設置しております。

また、4月より感染対策の一環として、外来会計ホルダーを廃止させていただきますので、ご理解の程お願い申し上げます。
(W・Y)

INFORMATION

東邦大学医療センター
大森病院

Omori
Ota
Tokyo



<https://www.omori.med.toho-u.ac.jp/>

初診受付時間

月曜日～土曜日（下記休診日を除く）
8:30～11:00（一部を除く）

休診日

第3土曜日・日曜日・祝日・
年末年始（12月29日～1月3日）

臨時診療日

7月15日（月・祝）・9月16日（月・祝）・
11月4日（月・祝）
平日診療体制といたしますが、診療予約のない方は「休日加算」を適用いたします